

紹介

黄錫全著

『先秦貨幣通論』

江村 治樹

春秋戰國時代の貨幣は、まとまった形で開断なく出土し、近年新発見も相繼いでいる。この時代の貨幣についてはほとんど文献史料に記載がなく、出土する青銅を中心とする貨幣は當時の貨幣經濟を説明する材料としてだけでなく、國家や社會の問題を検討する貴重な實物資料となっている。

このような貨幣の発見や研究は、中國では『中國錢幣』という貨幣研究専門雜誌や各種の考古學關係の雜誌で紹介されているが、大部の著録や研究書も近年相繼いで出版されている。著録としては、山西省錢幣學會編『中國山西歷代貨幣』（山西人民出版社、一九八九）、朱華『三晉貨幣——山西省出土刀布圓錢叢考』（同上、一九九四）、石永士等『燕下都東周貨幣聚珍』（文物出版社、一九九六）など地域限定的なもの

他、汪慶正主編『中國歷代貨幣大系——先秦貨幣』（上海人民出版社、一九八八）、朱

活等『中國錢幣大辭典・先秦編』（中華書局、一九九五）のような先秦貨幣を網羅する

ようなものも刊行されている。また、研究書としては、一九九〇年代には張弛『中國刀幣匯考』（河北人民出版社、一九九七）、蔡運章等『洛陽錢幣發現與研究』（中華書局、一九九八）などが出版されていたが、

部分的、地域限定的なものに止まっていたところが、二〇〇〇年紀に入って、先秦貨幣の整理と研究に關する、全面的で決定的な著述が出現した。それが本書である。本書は、先秦貨幣を網羅的に紹介するだけでなく、これまでの研究を丁寧に整理し、それに對する著者独自の認識も示されており、研究書としても第一級の書である。

本書の構成とおおまかな内容（カッコ内）は以下のごとくになっている。

第一章 中國で最も早い貨幣（貝貨）
第二章 金屬秤量貨幣（殷から春秋戰國までの青銅秤量貨幣、および銀秤量貨幣、黃金秤量貨幣、その他）

第三章 金屬鑄造貨幣（上）（空首布）

第四章 金屬鑄造貨幣（下）（橋足布、銳角布、尖足布、三孔布、方足布）

第五章 刀錢（尖首刀、直刀、明刀、齊刀）

第六章 圓錢（三晉兩周、齊燕、秦の圓錢）

第七章 楚國の貨幣（金版、銀幣、青銅貝貨、その他）

第八章 吳越巴蜀の貨幣（模造青銅戈や橋形銅器など）

本書は、このような網羅的な構成になっており、これまで貨幣として想定されてきたものはもれなく取り上げられているが、そのうち第三章から第五章まで、春秋戰國時代の三晉、燕、齊の青銅鑄造貨幣に關する部分が最も力が入られており内容も充實している。

本書の第一の特色は、先に述べたように、それぞれの貨幣について先行研究を全面的に整理紹介し、著者独自の見解が示されている点である。ここでは全部を紹介するわけにもいかないので、中國における最初の青銅鑄造貨幣であり、その年代や性格について最も見解の分かれている尖首刀と空首

布についての部分を紹介しておく。

まず尖首刀について、その年代は王毓銓氏が戦國期、鄭家相氏が春秋期のものとして以来、意見が分かれていた。しかし、近年では考古學的な観点にもつき春秋から戦國にかけてのものとする説が有力になってきており、黄氏も春秋中期以前から戦國中期に流通したものとしている。尖首刀はその性格についても意見が大きく割れている。王獻唐氏以来、燕國の貨幣とする説が有力であったが、その後、黄河下流域や燕國境内に居住していた北方系民族のものとする説が出され対立するようになった。近年では、出土例の増加にもなつて形式の分類が進み、燕國のものと北方民族のものが含まれるとする説が出されるようになってきている。例えば、上掲の張弛氏の書では、四類型に分けて燕國、鮮虞狄族、山戎、齊國のものがあるとしている。これに對して、黄氏は、いわゆる尖首刀はすべて鮮虞、中山の狄族の貨幣とし、燕國のものは含まないとする。ただし、形態上燕國初期の明刀と區別できないが、「明」字がなく尖首刀と同類の文字のあるものを類明刀型として、燕明刀の初期の形態としている。鮮虞、中

山の狄式刀については、五型十一式に分類して鑄造主體の分別と編年を詳細に検討している。すなわち、甲型は銘文の分析から春秋中期の白狄諸國のもの、乙型と丙型は戦國初期の中山國のものとする。丁型（針首刀）は出土地域が張家口や承德に限定されることから、魏による中山國の滅亡後、狄人の一部がこの地に逃れて鑄造したのかも知れないとする。そして、特殊な形態の戊型は戦國中晩期に趙國境内で狄人が鑄造したものとしている。注目されるのは、白狄族の小國や中山國の國家鑄造貨幣の他に狄族が民間で鑄造した貨幣の存在が想定されている点である。中國の研究者の先秦貨幣研究では、貨幣の發行主體についてあまり嚴密に考えない傾向がある。黄氏の見解は、先秦貨幣の性格を追究していく上で一石を投じるものである。ただし、文字の一部を地名ないし國名としている点は一般の研究者の考えを脱してはいない。尖首刀の文字は少なくとも八〇種類はあるが、このうち黄氏が國名として文字のある尖首刀は、全體の發見例から見て多數を占めるわけではなく、國名とするには難がある。空首布については、一般に春秋期に出現

するとされており年代に關してはあまり問題はなないが、發行主體に關してはかなり意見が分かれている。空首布は肩部の形態から平肩、聳肩、斜肩の三類型に分類される。文字の多くを地名と考え、周、衛、鄭、宋、晉など黄河中流域の諸國の發行と考える説が有力である。とくに、上掲の蔡運章氏等の書では、いくつかの根據を擧げてその鑄造權が統治者にあつたことを主張している。平肩空首は東周王畿の貨幣、斜肩空首布は晉國、聳肩空首布は衛、晉を中心とした貨幣とし、これら國家の王室、公室の統一した管理のもとに鑄造されたものとしている。これに對して黄氏は、空首布の出土地と文字の検討から、その鑄造には晉國の有力な世族である韓氏、魏氏、趙氏の三家が關與したとしている。すなわち、平肩空首布は春秋期の周王室の貨幣であるが、魏氏の貨幣も同じ形態であつた可能性がある。そして、斜肩空首布は春秋期晉國の韓氏、戰國の韓國の貨幣、また聳肩空首布は多くは鑄造したものとしている。なぜ、春秋期晉國の三氏のみが貨幣の鑄造に係つたのか、發行主體に對するさらに踏み込んだ検討が

必要であるが、傾聴すべき見解である。黃氏の見解には問題とすべき點も散見するが、先秦貨幣研究を深化させる上で有益な提言を多く含んでいる。

第二の特色は、ほとんどの先秦貨幣について、出土地、出典、その他の情報について詳細な一覽表が掲載されている點である。近年、先秦貨幣の出土例と出土數量は膨大な數にのぼり、全體的狀況を掌握し、研究に遺漏のないようにすることは極めて困難になりつつある。出典について見ると、地方で出版され日本では入手しがたい雑誌からも多く採録されている。黃氏は北京にある中國人民銀行の中國錢幣博物館副館長の職にあり、資料収集に有利な立場にある。それが全國的な視野に立つた最も完備した一覽表になって現れていると考えられる。以下、主要な一覽表のタイトルとページ數を列挙しておく。

- 表三「近五十年來出土先秦海貝主要部分統計表」(頁四五—五二)
 表一〇「平肩、斜肩、聳肩空首布出土情況簡表」(頁一〇八—一一四)
 表二二「平首尖足布一覽表」(頁一三三—一三四)

表一五「三孔布有關情況一覽表」(頁一五四—一五六)

表一六「三晉兩周小方足布大小輕重諸家所定國別及有關情況一覽表」(頁一七六—一八五)

表一七「平首布(橋足、尖足、方足)出土情況統計簡表」(頁一八六—一九八)

表一八「近五十年尖首刀主要地點出土情況一覽表」(頁二〇一—二〇四)
 表一九「燕明刀出土情況一覽表」(頁二二五—二三四)

表二一「齊明刀出土情況及形式分類一覽表」(頁二五九—二六八)
 表二五「齊大刀出土情況一覽表」(頁二八一—二八八)

表二九「近三十年出土比較完整的楚金幣統計表」(頁三四五—三四八)

表三〇「近幾十年楚國銅貝出土情況統計表」(頁三五七—三六〇)

方足布の地名は現在のところ一六〇種前後が確認されている。しかし、その地名の文字をどのように読み、どこに比定するかについては、研究者によってかなり意見が分かれている。表一六では、主要な研究者の

地名比定、地名の所屬國、現在の位置に関する見解が一覽の形で表示されており有用である。

第三の特色は、すべての先秦貨幣について拓本(一部寫眞、模本)が掲載されており、形態がわかるようになっていた點である。同一形態のものも類型別に拓本が掲載されている。また、文字についても拓本や模本により網羅的に示されている。地名數の多いものでも、尖足布六九點(圖五四)、方足布一五九點(圖六三)など、ほとんどすべての拓本が掲載されており、字形がわかるようになっていた。また、文字種類の極めて多い尖首刀、空首布(表八)も模本の文字一覽が掲載され、燕明刀や齊明刀の背文の模本一覽もある。もちろん鑄造の鑄型の圖面ももれなく載せられている。本書は、單なる代表的なもの拓本や圖面を一部サンプルとしてのみ出すのではなく、先秦貨幣の百科事典の體裁になっているのである。

本書は、すでに述べたように研究書として、また研究用の資料集として有益なだけではない。この一冊があれば先秦貨幣の全體像が容易に把握できるようになっており、

先泰貨幣に初めて接する者にとつても極めて便利な書である。

二〇〇一年六月 北京 紫禁城出版社

B5版 目次・圖表目錄二頁 前言四頁

本文・文獻目錄四二五頁

Dorothy Ko 著

*Every Step a Lotus:
Shoes for Bound Feet*

小野和子

美しい本である。それは纏足の靴(ロクタス・シューズ)そのものの美しさだが、同時に、そこに女性の美への追求を讀みとろうとした著者の發見した美しさでもある。數十點に及ぶ色彩豊かな圖版の頁を繰りながら、私にとって、今まで歴史は、漢文文獻と同様モノクロの世界だった、少なくとも自覺的にカラーの存在を考えてみたことがなかった、とあらためて思った。

著者ドロシー・コウは、アメリカのコンピア大學バーナードカレッジの教授で、先年、カナダのバタ・靴博物館主催の「歩

歩 蓮華を生ず——清末中國における女性の生活と靴」という展覽會の企畫に參畫し、同博物館との連携のもとに本書の刊行に至った。したがって本書には、この時の展示品が多数収録されているが、この外にも、海外の華僑のなかに保存された纏足の習慣や關係資料に據っている點が特徴的だ。これら資料の収集時期から考えれば、とりわけアートとしての價值をもつ靴が重點的に収集されたことが想像できる。

纏足については、近年いくつかの專著や論文が出ている。私自身も過去に女性史を書くなかで何度か觸れたことがあるが、私がいメージしてきたのは、ゆがめられた女性の身體の苦痛であり、男性による抑壓の象徴としての纏足であつて、その上を覆う小さな刺繡の靴は、見、かつ語るだに値しない薄汚れたぼろ布に過ぎなかつた。このような纏足についての既成觀念は、たんに學界ばかりでなく、廣く一般の人々のなかにも牢固として存在する。それはしばしば、遅れた中國、非文明の中國の象徴であつて、不纏足運動こそが女性史における近代の開幕を告げるものに外ならなかつた。

このような見方に對して、著者はこれま

でも深い疑念を呈して來た。著書『*Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China*』(Stanford Univ. Press 1984)「中國の衣服と體のイメージ——一六世紀から一九世紀におけるヨーロッパ人の旅行記から」(『論集中國女性史』吉川弘文館、一九九九)などである。著者によれば、上述のような纏足のイメージが形成されたのは、中國の近代になつてのことであつて、外國人が壓倒的な優位に立つていた。彼らは「自らの近代を完成するために他者としての中國」を必要としたのであつて、纏足は「中國文化の恥部」とする近代の價值觀が形成されたのはこのような状況においてだった。本書は、その既成觀念を取り拂つて、當時の女性自身の詩文を讀み込み、彼女たちの目線に立ちながら、纏足の意味を根底的に問い直そうとする、大膽かつ野心的な書物である。以下、各章ごとにその内容を紹介していく。

第一章は纏足の「起源」である。

ここでは、福建・江西・浙江の南宋時代の墓から出土した靴に注目する。このうち